

「静かな誕生日」

—2 稿—

2025/08/16

しのめ ののの

〈人物表〉

木村 夏輝

(17)

男子高校生。3年

1. 高校・外観（朝）

うだるような夏の晴天。木に蝉がとまっている。

2. 高校・廊下（朝）

制服姿の木村夏輝（17）、通学鞆を手に廊下を歩いている。地味な外見。時折欠伸をしている。

3. 3年2組の教室（朝）

夏輝、寝ぼけ眼で教室の後方扉を開ける。

眼前でクラスメイト達が盛り上がっている。騒ぎで眠気が飛ぶ。

黒板に大きく「7/31 りょーすけ 誕生日おめでとう！」と書かれている。その周りにはふぎけた絵やコメント、花火のようなイラストの装飾など。教室の後方で男子生徒が照れている。

周囲に生徒たちが集まって一緒に写真を撮ったり、プレゼントを渡したりしている。

夏輝は茫然としていたが、ふと得心した表情に変わる。盛り上がるクラスメイト達を硬い表情で見つめてから、その脇を通り過ぎようとする。

照れていた男子、軽く夏輝にぶつかってくる。

夏輝を振り返り、半笑いで謝罪の仕草。

夏輝、硬い笑顔で謝罪を制し、黒板を指差す。

男子、照れたように頷く。

夏輝、男子の背中をぎこちなく叩いて自席へ。

男子、軽く手を挙げて感謝するような仕草。

夏輝、着席する頃には真顔になっている。

賑やかな黒板を見つめる。

4. 3年2組の教室（朝）

生徒たちがまばらに着席し、授業を受けている。彼らの机には、夏期講習のプリントや教材など。

黒板前で教師が何やら熱心に話している。

黒板には、消された誕生日祝いの痕跡が薄らと見え

ている。夏輝、そわそわとそれを見つめている。

5. 安アパート・外観（夕）

片田舎の古いアパート。

6. 木村家・ダイニングキッチン（夕）

2DKの狭い一室に、通学鞆を持った夏輝が帰宅する。鞆を適当に下ろし、そのまま洋室の扉の前へ。扉をそっと開けて中を覗く。

派手な衣類が散乱するベッドの上に、着の身着のままの母親が爆睡している。時折りびきをかいている。夏輝、諦めたように扉を閉じる。音を立てず、ゆっくりと。

7. 木村家・ダイニングキッチン（深夜）

ダイニングキッチンの明かりだけが点いたりびんぐ。夏輝、ダイニングテーブルの椅子に座ってぼんやりとしている。

テーブルには公共料金の督促状やチラシが散乱している。夏輝の前にはスマホが置かれている。

壁に掛かった時計が0時を指す。

夏輝、それを見てスマホに視線を落とす。スマホは静か。母親の部屋からはいびきが聞こえてくる。

夏輝、詰めていた息を吐き出す。

その場を動けず俯く。

8. 木村家・ダイニングキッチン（朝）

母親の洋室と隣接する和室から、通学鞆を持った夏輝が出てくる。

母親の部屋の扉は開け放たれ、誰も居ない。

夏輝、虚ろな目でそれを一瞥し、そのまま家を出る。

9. 3年2組の教室（朝）

通学鞆を持つ夏輝、緊張した面持ちで教室の後方扉

の前に立っている。

恐る恐る扉に手を伸ばし、思い切って開ける。教室は閑散としている。数人の生徒がまばらにたむろし、雑談している。誰も夏輝に目を向けない。黒板には何も書かれていない。

夏輝、思わずショックを受けたような表情。すぐにそれを隠し、自席へ鞆を置く。

徐に壁のカレンダーを見に行く。

7月のカレンダーのまま。

複数の日付の欄に、生徒の名前とケーキのマークが書き込まれている。31日の欄には「りょーすけ」という文字と、ケーキのマーク。

夏輝、7月のカレンダーを破る。8月のカレンダーは真っ白。1日の欄にも何も書かれていない。

夏輝、手元のカレンダーをぐしゃ、と握る。

10. 木村家・ダイニングキッチン（夕）

夏輝が帰宅し、通学鞆を適当に下ろす。

ダイニングテーブルの隅に、メモ書きと千円札。冷蔵庫を開ける。ほぼ何も入っていない。

ため息を吐いてテーブルに戻り、千円札を手に取る。ふと、散乱したチラシに目が留まる。上の方に、花火大会のチラシが置かれている。

11. 近所の田舎道（夕）

夏輝、花火会場付近の田舎道を一人で歩いている。Tシャツに短パンというラフな格好。

人々が追い越していったり、すれ違ったりする。みな家族や友達、彼氏彼女と共に歩いている。いずれも楽しい様子。浴衣を着ている人もいる。

夏輝、不意に足を止める。おもしろくない顔をしているのは夏輝だけである。

夏輝の足が踵を返し、来た道を戻ろうとする。ふと何かにぶつかる。小さな男児である。

男児は泣きべそをかいている。膝を擦りむき、血が滲んでいる。

夏輝、困った表情。

12. 小学校・校庭（夜）

仮設テント屋台や人々で賑わう華やかな校庭。田舎らしい、小規模の花火大会といった雰囲気。

13. 小学校・校庭隅の水道前（夜）

夏輝が男児の膝を洗っている。男児は痛みで半泣き。洗い終わり、手を繋いで歩き出そうとするが、男児が動きたがらない。

夏輝、困った表情。少し考えてから、仕方なく男児をおんぶしようとしやがみ込む。男児は素直に従う。

14. 小学校・校庭の屋台列付近（夜）

男児を背負った夏輝、屋台列の端のテントへ向かっている。すっかり汗をかいている。

テントの下ではスタッフと、2〜30代前半の男女

3人が話し込んでいる。その周りには5人の子ども。

一同が夏輝と男児に気づく。スタッフ以外が、あつ

という表情を浮かべる。

子ども達、男児の名を呼びながら駆け寄ってくる。

夏輝が男児を降ろすと、男児が子ども達に囲まれる。

口々に話しかけられる。

男児、涙目になりつつも恥ずかしそうに目元を拭う。

子ども達に向かって笑顔を見せる。

男女3人も近づいてくる。両親らしき2人が男児を

抱きしめたり、撫でたりする。

夏輝、その様子を死んだような目で眺めている。

両親が顔を上げ、警戒した表情で夏輝に会釈する。

夏輝、ぎこちない笑顔で会釈を返し、男児に手を振

る。子ども達に囲まれた男児、振り返さずにじっと

見ている。夏輝、その場を離れる。

ふと視線の先に、数人のクラスメイト達がいることに気づく。その中には「りょーすけ」もいる。みな楽しげな様子。女性陣は浴衣を着ている。

夏輝、隠れるように慌ててその場を去る。

15. 近所の田舎道（夜）

楽しげな人々が花火会場に向かう中、夏輝だけが逆方向に歩いている。伏し目がち。

ふいに夏輝の足が止まる。目を見開き、振り返る。

遠方の空に花火が上がっている。

周囲の人々が声を上げ、笑顔で見上げたり、足を早めたりしている。

ひとときわ盛り上がる中学生グループが夏輝を追い越していく。

黒い夜空に、花火が次々と上がる。黒板の装飾にも似ているが、それより遥かに美しい。

茫然としていた夏輝、思わず表情を崩す。ぐにやりと皮肉めいた笑顔。しかしどこか嬉しそうでもある。

頬に、涙が一筋流れる。

おわり